**工藤　汀翠 （くどう・ていすい）**

**１、プロフィール**

中学で新傾向俳句を作り、30代で「鹿火屋」の原石鼎に師事、東奥日報社内で俳誌「辛夷花（こぶし）」を主宰。晩年の意欲は句集三巻に示される。県文化賞・県褒賞を受ける。

＜生没＞

1899（明治32）年３月17日 ～ 1986（昭和61）年３月11日

＜代表作＞

『静かな齢』『玫瑰』

＜青森との関わり＞

南郡碇ケ関村に生まれる。県新聞界・放送事業などの要職に就く。県俳壇への貢献により県文化賞・褒賞を受けた。

**２、作家解説**

俳人。明治32年南津軽郡碇ケ関村に生まれる。本名は哲郎。大正２年県立青森中学校に入学。同級の下条雄三(三奎城)に勧められて句作、太田清吉(耳動子)らと､俳誌「ひとみ」を刊行する。６年頃新傾向俳句にひかれ､河東碧梧桐の「碧」､中塚一碧楼の「海紅」、野辺地の「手捏(てづくね)」に投句。７年青森中学校を卒業、勤務した会社の各支社の異動の後、昭和５年東奥日報に入社。10年拒絶していた俳句をはじめ、太田耳動子の「睦月」に投句、次いで「鹿火屋(かびや)」の原石鼎に師事する。

21年社内に俳句会を興こし､俳誌「辛夷花(こぶし)」を発行する。23年以後要職の忙しさから中断していたが､32年再び「鹿火屋」に投句をはじめ､石鼎の未亡人原コウ子に師事する。34年青森県俳句懇話会の初代会長となり、第一句集『雪嶺』を刊行。

県俳句界への貢献によって38年青森県文化賞、40年青森県褒賞を受けている。

45年第二句集『静かな齢』を刊行。54年合浦公園内に句碑建立、碑面の句は「藤だなの藤の実たるる月日かな」である。また同年第三句集『玫瑰（はまなす）』を刊行。この年懇話会会長を辞める。

61年３月11日死去。行年86歳。「感じを誇張」せず「目前些事をさかまへて来て」「心持の深い句を作る」という石鼎晩年の主張は、第三句集『玫瑰』の竹内俊吉の序の文に通うものがある。この61年の暮れ遺句集『二月の顔』が刊行された。

**３、資料紹介**

〇『静かな齢』

図書

1970（昭和45）年２月11日

182mm×128mm

昭和45年２月11日発行。工藤汀翠の自選400句（第１句集『雪嶺』34年刊行以後44年までの句）を収める。発行所は鹿火屋会。序は原コウ子・竹内俊吉。巻末に略年譜、著者自身のあとがきを載せる。